No.360
令和2年3月

区政会館だより

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会への23区の取り組み

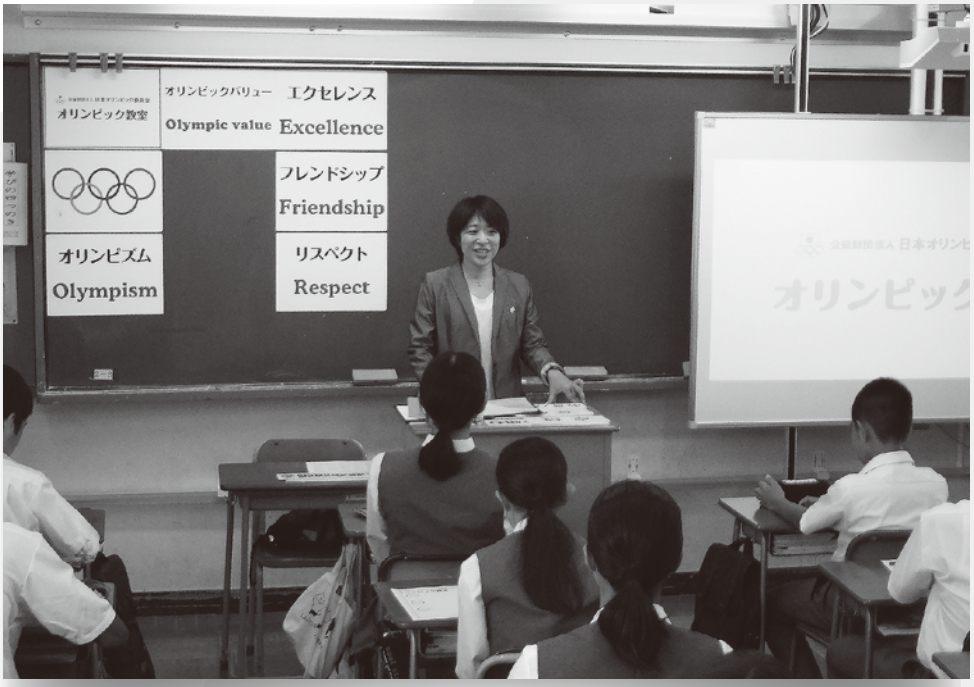
「としま新時代」の幕開け 世界を魅了する芸術文化を発信!

豊島区

◀勢揃いした池袋駅周辺を周遊する電気バス「IKEBUS」
Photo Hiroyuki Mayuzumi

オリンピックバリューを板橋から発信!

板橋区



▲区内の中学2年生を対象としたJOCオリンピック教室

特別区長会事務局
特別区議会議長会事務局
特別区人事・厚生事務組合
公益財団法人特別区協議会
東京二十三区清掃一部事務組合
特別区競馬組合

豊島区

「としま新時代」の幕開け 世界を魅了する芸術文化を発信！

２０２０年７月19日の聖火リレー10日目は豊島区からスタートします。区の中心駅である池袋駅周辺は次代を見据えたダイナミックな開発が進められ、「国際アート・カルチャー都市」の拠点となる施設が続々オープン。聖火リレーの熱気とともに、豊島のまちに満ちる新たな息吹に触れてみてはいかがでしょうか。

豊島区の価値を高めるオンリーワンのプロジェクト

古くから多様性に富む文化を創造する土壌があった豊島区。特有の文化資源を活かし、「文化の力」で日本の推進力となるまち＝「国際アート・カルチャー都市」の推進に力を入れています。東京２０２０大会、さらにその先の文化レガシーの継承も視野に入れ、個性と存在感が際立つ戦略的なまちづくり事業が進められてきました。都市構想の基本理念は「まち全体が舞台の誰もが主役になれる劇場都市」であり、「ひと」が主役となって広がるまちづくりは、限りないパワーと可能性にあふれています。

「劇場都市」の新たな顔として、２０１９年末までにお目見えし話題を集めた場所・事業が３つあります。１つ目は世界への文化発信の拠点となる“劇場公園“として大規模リニューアルした「池袋西口公園」です。公園内には、クラシックコンサートやダンス、演劇などが上演される野外劇場、舞台上部に設置された大型ビジョン、そしてシンボリックな巨大リング型オブジェ“グローバルリング“が備えられています。大会期間中にはここでライブサイトが開催され、大型ビジョンを利用したパブリックビューイングが行われる予定です。併設の「グローバルリングカフェ」は、公園に訪れる人々の憩いの場や普段使いとしてはもちろん、大会観戦に訪れた国内外の観光客の来店を想定し、東京観光の情報を発信する窓口を備え、多言語対応可能なスタッフを配置しています。

池袋西口公園で本格的なクラシックコンサートを

２つ目は１３００席の劇場をはじめとする８つの劇場と広場が一体となった「ハレザ池袋」です。ハレザタワーと東京建物ブリリアホール、としま区民センターの３棟と中池袋公園を加えたこのエリアが、古典芸能からアニメなどの多彩なサブカルチャーまで、幅広い文化と芸術の舞台となってさらなる賑わいを生み出します。舞台や映画を鑑賞後に、まちに繰り出してその余韻を楽しみ、おいしい食事をしながら池袋を夜まで堪能してほしいとの思いから各施設に飲食や買い物ができる店舗は必要最小限にしています。そうした「アフター・ザ・シアター」構想のきっかけとして、グローバルリングの下で本格的なクラシック音楽を堪能できるコンサートの定期開催も始まりました。ナイトライフ観光の充実でまちの魅力は一層高まることでしょう。

8つの劇場と広場が一体となった「Hareza 池袋」

3つ目は池袋の主要スポットをめぐる電気バス「イケバス」の誕生です。真っ赤な車体とデザインがかわいいこのバスは、1台1台が手作り。カラフルなシートの座席、寄木細工模様の床など、内装デザインは、全車、少しずつ違います。地域の回遊性を高めることにとどまらず、大きくイメージを変えていくまちの風景に欠かすことのできないシンボルとなっています。

これら文化芸術を広める活動を支えているのが区民です。まちづくりに積極的に参加する機運が盛り上がっており、大会に向けて商店街や地域それぞれのつながりの中でおもてなしのまちを目指しています。豊島区は日中韓の都市間文化交流プロジェクト「東アジア文化都市」の2019年開催都市に選ばれました。日本の代表として、マンガ・アニメを中心として多彩なプログラムを展開。区民も大勢参加して、オールとしま体制で文化交流イベントを盛り上げました。豊島区の文化の力は東京2020大会、またさらにその先に向けてますます活性化していくことでしょう。

人と文化がクロスする多様性が生む文化的活力

東京2020大会のホストタウン事業で、豊島区はセントルシアとバングラデシュ人民共和国、2つの国のホストタウンとして登録しています。遠く離れたカリブ海西インド諸島にあるセントルシアとの貴重な縁をつないだのは、区内で料理教室や英語教育活動を行う青木マーガレットさん。PTAのママさんバレーや、「東京大塚阿波踊り」に参加したりと、パワフルに活躍する地域の有名人です。一方のバングラデシュと区の縁は古く、「ボイシャキ・メラ」という同国の新年を祝うお祭りが2004年4月以来、毎年池袋西口公園で開催されています。日本各地からおよそ5千人もの バングラデシュ人が集うこのお祭りでは、カレーを中心とした料理が屋台で振る舞われ、日本人客も多く来場して大いに盛り上がります。昨年は初めての試みとして、同国の国民的なスポーツ「クリケット」による交流会を開催。区職員も参加して珍しいスポーツ体験を楽しみました。また、区内の小学校では、「世界ともだちプロジェクト」の一環として、2019から20年度へかけて両国出身者による授業を実施していきます。大会期間中には両国選手団を招き、小中学生や区民とのスポーツや文化交流会が実施される予定です。歴史をひもとけば、いつの時代も様々な人や文化を受け容れながら、独自のカルチャーを生み出してきた豊島区。まちとそこに住む人々が培ってきた寛容で、住みやすく、活気のある地域性は、これからも懐深く世界中の人を惹きつけていくことでしょう。

区内の小学校で授業をする青木マーガレットさん

バングラデシュの国民的なスポーツ「クリケット」による交流会

板橋区

オリンピックバリューを板橋から発信！

豊島区から受け継いだ聖火ランナーが、板橋区内を駆け抜けるのは2020年7月19日。都内の自治体として初めて北区とともにJOCパートナー都市となった同区では、区民一人ひとりがオリンピックバリューを無形のレガシーとして共有するため、区を挙げてスポーツの振興と教育に積極的に取り組んでいます。

長年の友人「イタリア」に心づくしのおもてなしを

板橋区は、東京2020大会においてイタリアのホストタウンに登録されています。板橋区とイタリアの友好関係は遡ること39年前、1981年に板橋区立美術館において開催された「第1回ボローニャ国際絵本原画展」が始まりです。この開催をきっかけに、板橋区とイタリアのボローニャ市の代表者が相互に訪問したり、ボローニャ見本市協会から児童図書の寄贈を受ける等、長きに渡る交流の結果、2005年に板橋区とボローニャ市は友好都市交流協定を締結しました。そして2018年、これらの様々な交流の積み重ねが今回の協定締結に大きく寄与し、イタリアオリンピック委員会と「東京2020オリンピック競技大会期間前及び期間中トレーニングに係る協定」を締結。東京2020オリンピック競技大会期間前・期間中、イタリアバレーボールチーム男子代表・女子代表がともに区立小豆沢体育館を練習施設として使用することになりました。板橋区では2019年7月に誘致記念事業の一環として、区出身で元バレーボール女子日本代表選手の落合真理さんを講師に招き、同体育館で小学生対象のバレーボール教室を開催。同年イタリアのホストタウン登録が決定し、イタリアとの友好の歴史がさらに深まることとなりました。

小学生を対象としたバレーボール教室

板橋区ではホストタウン登録決定後、クリアファイルの作成・配布や、本庁舎への横断幕・懸垂幕の掲示など、区民への周知を図っています。また、東京2020大会開催までには区民を中心にした「板橋区イタリアバレーボールチーム応援ボランティア」を結成し、イタリアバレーボールチームの応援や会場運営等のサポートを行っていく予定です。

2020年は、ボローニャ市と友好都市交流協定を結んでからちょうど15周年を迎えます。1月には本庁舎1階のイベントスクエアにて、イタリアバレーボールチームの紹介パネル等を展示した「イタリアバレーボールチーム応援イベント Volare!ITALIA～2020年 夏 いたばしにやってくる～」を開催し、区民の応援機運も日を追う毎に高まってきています。夏を迎える頃にはきっと、古くからの友人であるイタリアを「オール板橋」としてサポートする

イタリアバレーボールチームの紹介パネル等を展示

機運が最高潮に達して、強豪イタリアバレーボールチームが躍進する大きな力となることでしょう。

都内初！JOCパートナー都市協定締結

日本初のトップレベル競技者用トレーニング施設として設置された味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）の最寄り駅が、区内の都営三田線板橋本町駅や本蓮沼駅ということもあり、板橋区はトップアスリートとの関わりが深い区でもあります。以前よりスポーツイベントやスポーツ教室を実施し、トップアスリートと区民との交流に注力していますが、2015年からは「JOCオリンピック教室」もスタートしました。これは（公財）日本オリンピック委員会（JOC）がオリンピック・ムーブメントの普及・啓発活動として取り組んでいる事業の一つです。区内の中学2年生を対象に、オリンピアンが教師役となり、自身の様々な経験を通して「オリンピズム」や「オリンピックの価値」等を伝えると同時に、この価値がオリンピアンのものだけでなく、多くの人が共有し日常生活にも活かすことのできるということを教えています。これまでに教師役となったのは、スキー、水泳、バドミントン、バスケットボール、陸上競技、ソフトボール等、様々な競技のオリンピアン。まさに頂点を極めたアスリートが、運動が苦手な生徒も参加できるように工夫された授業を行っています。

そして、スポーツの振興や教育に意欲的に取り組む板橋区は、都内の自治体としては初めて、2019年に北区と共に「JOCパートナー都市協定」を締結しました。この協定により板橋区では、JOCと連携したオリンピック・ムーブメント推進事業を、継続的かつ長期的に実施することとなります。同年9月に開催された「2019オリンピックデーラン板橋大会」も、都内の自治体が主体となって実施するのは初めてのこと。区内外から集まった多くの参加者が、オリンピック実施競技体験や10名のオリンピアンによるトークショーなどを楽しみ、ウォーキングで汗を流しました。

JOCパートナー都市協定締結式
（左:坂本区長　右:山下JOC会長）

NTC周辺道路も北区と共同でバリアフリーへと整備を進め、パラリンピアンを迎える準備も万端です。2018年には、AR（拡張現実）や360度VR動画を取り入れ、まちの回遊性を高める板橋区観光アプリ「ITA－マニア」をリリースしました。このアプリは区内の観光スポットや飲食店、公共施設など約300か所を掲載し、条件を入力するとその日の気分に合わせた散策コースを自動作成することができます。多言語にも対応し、Wi－Fiの繋がらない場所でもルート検索ができるオフラインマップ機能もあるため、増加する外国人観光客に板橋区の魅力を発信するツールとしても大活躍するのではないでしょうか。

板橋区は、東京2020大会終了後も持続可能な価値の創出、オリンピック・ムーブメントの推進・普及啓発、スポーツを核としたまちづくりを展開しています。

オリンピックデーラン板橋大会での記念撮影
提供:JOC